

文化事業でのサポートスタッフ関係者の皆様へ
アートに興味がありもう一步関わってみようという方へ

いちアートボランティアが

モヤモヤの正体

をみつけたくて

アートボランティアに関わる人たちに

話を聞きまわった3年間の軌跡

2019 → 2021



本報告書
PDFダウンロード

ナルホド

静岡県文化財団 ふじのくに文化プログラム推進事業助成
ふじのくに未来財団 団体指定助成事業

「多世代にまたがる文化事業とまちおこし事業に関わる
ボランティアスタッフの意識調査とボランティア活動のための調査と実践」

は じ ま り

あなたはボランティア活動の意味をどうとらえていますか。私は、『無償で活動のお手伝いをする』ぐらいの認識でした。例えば、友人から「空いていたら手伝って」と頼まれるイベントのお手伝い。有償だったらアルバイト、無償だったらボランティア。友人が困っていたら1日手伝って、その結果、食事や謝礼があるかどうかその時次第。それが、いつの間にか声がかかる回数が増え、長期化してプロジェクトの一員になっていたり、渦中に入り込んでしまったり。ボランティアについて何の知識もないままの活動。こんな例は稀かもしれませんが、アートボランティア、文化活動サポーターは充実感があり楽しいけれど、なんかモヤモヤするそんな発起人を中心に、一度、まわりに話を聞いてみようとはじまった3年間の調査旅です。

モヤモヤ

背景と目的

文化庁長官の河合隼雄氏が「文化ボランティア」ということばをはじめで使用し、広めてから20年余り。私たちの住む静岡県静岡市では、150万人以上の観客を集めてボランティア中心で全てを運営している「大道芸ワールドカップ in 静岡」があり、30年の歴史をもつ。近年では、各地でアートイベントや芸術祭が行われ、災害ボランティアとは性質が違う「文化活動におけるボランティア」に参加する市民も増えてきている。私たちもその1人である。しかし、いざ参加してみると良い面だけではなく様々な問題を感じ、また、参加時の熱い想いが冷め、活動から離れていく市民も少なくない。また、予算不足、それに伴う人材不足、運営陣の経験不足によって、ボランティア運営が後回しになってしまっている状況も目にする。本事業は、この問題を解き明かすべく、県内の文化活動におけるボランティアやサポーターについて、運営団体、ボランティア参加者、参加アーティストに活動内容及び、ボランティアの仕組み、コミュニケーションについてインタビュー、アンケート調査を行っていく。2019~2021年時点の「文化活動におけるボランティア」がどのような環境の中で行われているか、当事者たちはどんなことを考えているかを調査・記録し、今後も地域の文化活動の中で大事な担い手である市民ボランティアにおいて、運営側は参加してもらいやすく、参加側は充実した活動ができるように、そして、それぞれのマッチングの促進を図るための方策を検討するものである。

本事業の体制 本事業は以下の体制により実施した。

- ・繁田 和美 しげたかずみデザイン事務所（プロジェクトリーダー・調査員）
- ・深野 裕士 一般社団法人 マチテラス製作所 代表理事（アドバイザー・調査員）
- ・高橋 晃一郎 音楽の架け橋メセナ静岡 事務局長（統括責任者・事務局）

インタビュー、アンケートにご協力ください。

静岡県内では年間を通じて各地で多くの文化・芸術に関するイベントが開催され、多くの人が楽しみを分かち合える状況になっています。そしてそのイベントは多くのボランティアの皆さんによって支えられています。

ボランティアとしてイベントに参加することで、経験としての楽しさ以上の喜びを得られるという声を聞くこともありますが、一方で悩まされることも少なくないと感じています。

今回、私たちはこのイベント開催には欠かせない「ボランティア」の実態を調査し、「ボランティア」のあり方を再考したいと活動を始めました。そこから集えてきたことにより、これからの「ボランティア」のあり方を設定できれば、開催されるイベントの持続性が増し、さらに発展できると考えています。ひいてはこの情報がより豊かな地域にもなることにつながると考えています。

そのため、まずは皆様から活動されている現状、活動の様子をお聞かせいただきたくお願いいたします。日々お忙しな中でのお願いとなりますが、ご協力のほどお願いします。

調査の内容 インタビュー：グループ形式（約1時間）形式で実施。
時間は60~90分程度。

アンケート：個人・無記名形式にて会場に置いていただく形で実施します。
（無回答可形式）

日時***

会場***

結果の報告について*年度末に報告会を予定（2019~2021年度/毎年年度を予定）

調査担当 高橋 晃一郎・深野 裕士・本間 美智子・藤田 和典

*この調査は、静岡県芸術文化振興局「ふじのくに文化プロジェクト」実施を受け実施しています。

静岡県芸術文化振興局企画課（静岡市駿河区）事務局 事務局 高橋 晃一郎
〒420-0021 静岡市駿河区一丁目50番地 静岡市芸術文化振興局
www.artstouch.jp TEL/FAX 054-272-2600

※ アートボランティア

この調査において、**アートボランティア**の定義を以下とする。芸術文化活動、各地で開催されるアートプロジェクト活動にて、主催者、アーティストをサポートする人々。生業ではなく、無償、交通費食費などの謝礼での活動。ボランティア精神の有無は問わない。

モヤモヤ



※1 ボランティア【volunteer】（義勇兵の意）志願者。奉仕者。自ら進んで社会事業などに無償で参加する人。「一活動」広辞苑

ボランティアは、ラテン語のボランティア voluntās（自由意志）を語源としており、自発性に裏づけられた奉仕者、篤志家を意味するものであった。保健、福祉、教育などの事業においては、自発的または自主的に無償の奉仕活動をする人々をさし、自発性または自主性、善意性、無償性、先駆性ならびに自己犠牲を伴うことがその行為の基本的特性とされていた。しかし、産業社会の近代化、国際化が急速に進むにつれて、ボランティアの活動領域は身近な地域の活動から国際ボランティアに至るまで多様な活動に拡大していった。日本大百科全書

※2 河合隼雄 第16代文化庁長官（2002-2006）臨床心理学者 心理療法家。文化ボランティアについては、「定義をして活動範囲を限定するのは好ましくないが「文化芸術に自ら親しむとともに、他の人が親しむのに役立ったり、お手伝いをするようなボランティア活動」ぐらいのとらえ方をするのが良いでしょうね」と語っている。大久保邦子監修「文化ボランティアガイド」より

1年目(2019年度)

とにかくインタビュー

参加しやすいボランティアって？
満足している？なんで続けているの？

UNMANNED無人駅の芸術祭
富士の山ビエンナーレ、SPAC
大道芸ワールドカップin静岡
七間町ハプニング・etc.



ボランティアが私の居場所

S.T氏 O.Y氏 (SPACシアタークルー)

10年やっているが正直やめる理由がない。不満がないのとは違う。不満はあるけど、やめる理由がない。業務の内容や日時を各々好きなように変えられるところが良いところ。SPACのボランティアが私の居場所になっている。私の場合、ボランティアという感覚はないし、仕事でもない。シアタークルーというカテゴリでしかくれない。週末何かやることがあるのは幸せなことだと思っている。



私はボランティアではない

杉山 雅一氏 (七間町ハプニング・ボランティアスタッフ)

僕はボランティアとして活動している意識がそもそもありません。個人的な繋がりでお世話になっているから手伝った結果、お金をもらえなかったからボランティアだったという話。また、主催者のビジョンに賛同している点は大きい。将来的に力を貸してくれたり一緒にやっていくであろう人たちと知り合えたのが良かったけれど、自分としては、イベント後、「この前ありがとね。助かったよ」。そう言ってもらえるだけでOK。別にそこで対価や別の仕事を求めているわけではないから。

このインタビューは「ボランティア」という言葉について安易に使って良いのか、もっとふさわしい名前があるのではないかと、その後考え、悩み続けるきっかけとなった。

「ファン」という感覚

望月 亜紗子氏

(UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川・サポーター)

制作過程に携わせてもらったおかげで地域のことや作品に込められた意図がより身近に感じられて、ボランティアに参加して良かったと感じた。たまたま形がボランティアなだけであって、自分としてはこの芸術祭の「ファン」という感覚。まちづくりの考え方やアーティストさんの考え方から得るものは大きく勉強になっている。

小栗 さゆり氏

(UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川・サポーター)

単純に楽しい。作家さんが茶工場を下見に来た時はまっさらな状態だったのに、その日のうちに彼の頭の中で展示の構想ができあがったのを目の当たりにしたときは刺激的だった。



藤井 絵氏 (富士の山ビエンナーレ・サポーター)

作家さんも、ボランティアも打ち上げに参加してるんです。ボランティアを大事にしてくれている。年齢や置かれている状況が全く違う知り合いが増える。これがなかったら関わるのがなかったんじゃないかなという人も結構関わることになりました。いろいろな人がいて面白いんです。私にもできることがあるなら手伝いたいというのがボランティアとしての正直な気持ちです。

世代間ギャップ!?

とっさのトラブルに

対処できるスキルは必要か

中村 光太氏・社会人 H氏・大学生

(大道芸ワールドカップin静岡・ボランティアスタッフ)

大道芸は元々ボランティアしか存在しない組織でした。意思決定はボランティアが行うということが、30年前の立ち上げ時からのポリシーです。自分たちで、この街に必要な文化や芸術はなんだろうと試行錯誤してやっているのは、大道芸のエネルギーの根幹にあるのかなと思っています。(中村さん)

新人ボランティアが翌年も継続してくれる仕組み

りが弱いかなと思っています。新人ボランティア向けの講習会で現場の写真などをスライドで作って説明したらいいと思いますが、そういうのができない状況にあるんですね。ポイントリーダーの講習会の出欠の連絡の把握も難しくなっている。(Hさん)

答えを教えてしまうと、その通りにしか動かないんです。毎回初めて起きるトラブルばかりなんです。それに対応できるようになるには、とにかく「イメージを自分で想像して考える」という習慣付けを、ひたすらしていくしかない。答のないオペレーションに対応できる人材を毎年どうやっていくかということなんです。(中村さん)

親切設計じゃないんですね。良くも悪くも。だから初めて参加した方は、よくわからないぞとなってしまう。(Hさん)

本当はもうちょっとメンターをしっかりと育てればよかったのかな。そもそも現場に仕事を渡さずしているのを直したほうがいいのかもかもしれません。(中村さん)

1年目のまとめ eeeeeeeeeee

充実したやりがいのある活動という声多数

インタビューでは、運営側とボランティアスタッフ双方に、ボランティアの背景(プロジェクト内容、仕事内容)から、交通費、食費などの条件、報酬の内容を伺い、それに対する満足度、そして、どんな問題があったかという話を伺った。インタビューをはじめた頃の私たちは、モヤモヤはあるか、困ったことや問題点はないか、それらを聞いて何か解決策を導き出したかった。そのインタビューの中で見えてきたモヤモヤの存在は、運営とボランティアとの関係性であり、情報伝達、業務内容、コミュニケーション、トラブル対応などであった。例えば、業務内容は、臨機応変の現場力が必要なものから単純作業のものがあり、そのミックスもあるが、それは参加後、気付くことであり、参加する前にはどちらのボランティア内容なのか分からないものもある。そして問題なのが、一旦引き受けしまうと辞めづらいことだ。また、具体的な指示がなく、場の空気を読んで作業するという難解な現場もある。しかし、一方、今回インタビューした方々の多くが、大好きなアートに関われる、作家の想いに触れ、作品に協力できる充実感、自分の成長や何かのヒントをもらい満足、という「アートの見返り、を存分に受け取っているアートボランティアだった。(繁田)

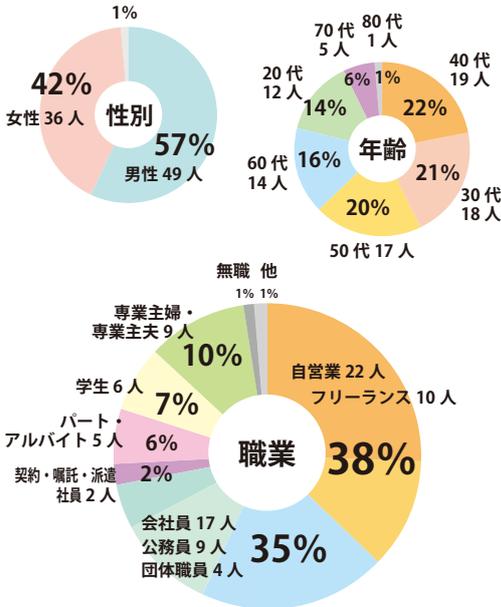
2年目のアンケート調査



1年目のインタビューでは「満足している」という声が多かった。その理由を調査統計することで今のアートボランティアマインドが明らかにならないか？

インタビューの声から51項目の満足度理由を作成しアンケート調査

1年目のインタビューでは予想外にも、今のアートボランティアに満足しているという声が多かった。私たちのインタビューでは不満、問題点を聞き出そうと質問を投げかけていたが、私たちは野暮な質問をしていたのではないかと考えた。そこで、もっと多くのアートボランティアに、その満足理由を聞きたい。それが私たちのモヤモヤ解決のヒントになるのではないかと考えた。アンケート調査の対象者は、1年目、2年目のインタビューに答えていただいた方々やその団体ほか、文化財団や知人に呼びかけ実施した。結果86名から回答があった。このアンケートでは満足理由を探りたいため、1年目のインタビューで出てきた声を拾い上げ、自身の満足理由になる選択肢にチェックする方式をとり、分析ではその満足理由をカテゴリ分けしている。(アンケート期間 2020.10~2021.3)



30代~50代 63%/自営業フリーランス38%
会社員公務員団体職員35%
働き盛り世代が多かった

結果

ボランティアは、時間も生活(収入)にも余裕がある人がやっている、だから無償で手伝ってくれるのだ...という主催側の一方的な解釈を感じることもある。しかし、現状では、「生活に余裕があって暇な人」ではなく「時間は自由になるが仕事もそれなりに忙しい人」だったり「裕福な暮らしができる収入の人が大半」とは感じられない。その活動に何らかの期待を持って貴重な時間をやりくりして参加している人が多いのではないかと。(繁田)

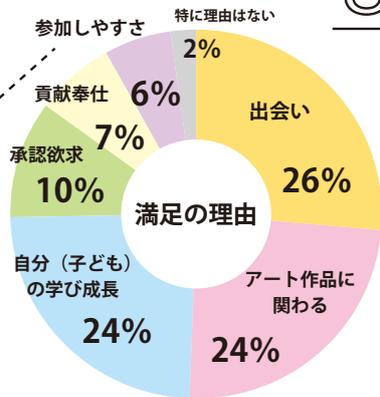
回答者に自営業フリーランスが多く見られたのは(調査員が自営業で依頼にバイアスがかかっていることは予想される)おそらく時間の使い方に自由度があり、イベントに参加する時間を自ら調整できることが推測される。正規雇用会社員の参加が少ないのは、20代から50代までは会社の中核であるためボランティアに使える時間が少ないと言われていることと関係があるのではないかと。(高橋)

SDGsが広まり、企業としても取り組むことが必要だと考えている企業も少なくない。しかし、それらは会社の業績に反映されると思ってのことであり、市民活動をより盛んにしようと思っただけではないことに留意すべきだろう。多くの企業の管理職にとっては、社員(部下)がボランティアをすることは、会社の仕事をそそごそに、ボランティアに勤しむという見方がいまだにあり、ボランティアを良しとしない雰囲気根強いのではないかと想像する。(深野)

86人
回答者

アートボランティアの満足度理由

「出会い」26%、「アート作品に関わる」24%
「自分(子ども)の学び成長」24%



本アンケートでは、アートボランティアに「満足している」と答えた方が8割以上。その満足理由の回答から3つのことに気づいた。(1)「アート作品に関わる/出会い/学び成長」という回答が全体の約3/4となり、一部のインタビュー者のみの少数意見ではないということ。(2)「参加しやすさ(項目は※を参照)6%」から推測すると、「参加しやすい環境」は満足度に直結するわけではないということ。この「参加しやすい環境づくりの項目」は、私たちは当初モヤモヤの要因になっていて考えていたため、満足度に直結しないというのは想定外の結果だった。(3)「貢献奉仕」や「承認欲求」は、7%10%。「ボランティア活動」から連想されるであろうキーワードがアートボランティアにおいて多い声ではないこと。この結果も驚きであった。この3点は、アートボランティア視点をアートボランティアマネジメントに取り入れる際の重要ポイントになっていくと考える。(繁田)

※参加しやすさの項目
・活動費用がかからない
・ボランティアの活動時間の確保
・活動場所が近い・有償だったから
・食費や交通費が支給 など
上記、ボランティアには助かる項目だが満足度の理由ではない

井原麗奈先生よりコメント

ボランティアの意識の変化としては、昔は自分の「認められたい」という参加者本人の気持ちが優先しがちだったり、「貢献奉仕」のためには自己犠牲や忍耐も必要だという認識でした。(小栗俊之『文京女子大学研究紀要』(79)第2巻第1号, 2000年,P86)それが今では、参加者には「受けての視点」に立って考えることが求められたり、参加者からも「気軽に、楽しく、喜び」をもって参加できる環境が求められています。参加者は高い自己研鑽や学習への意欲を持っていて、それが満たされると満足に繋がります。また人間関係が「受け手」と「自分」だけにとどまっていたのが、今は「複方向的なネットワーク」が増大しています。ひいては参加者同士の「出会い」への期待にも繋がっています。それを上手に提供できる主催者がボランティアの満足度を高められ、継続的にスタッフを獲得できる傾向にあるようです。



井原 麗奈 氏
芸術文化観光専門職大学 助教
(2017-2020年度:静岡大学
地域創造学環 准教授)
専門分野 日本近代文化史、
アートマネジメント、文化政策

2年目(2020年度)インタビュー アートの熱伝道

コロナウイルス流行 このまま前年のようにこの活動を続けるべきか

2020年2月28日。1年目の報告会開催はギリギリだった。その日の夜、静岡県内で初めての新型コロナウイルス感染者が確認されたのだ。そして、4月に入るとGWのイベントも中止や延期が発表。こんな異例のGWで、SPAC(静岡県舞台芸術センター)は「ふじのくにせいかい演劇祭2020」に変わってオンライン上で「くものうしせいかい演劇祭」を開催し、その決断、動画、映像作品、発信するメッセージに一視聴者としてもこのアートボランティア調査員としても、とても勇気づけられた。多くのイベント、公演、活動が中止になり、団体自体も存続の危機が迫っていた**2020年春**は、こんな状況でニコニコと「**ボランティアのインタビュー調査をお願いします**」などと、**とても言えなかった**のだ。私たちは、この調査をどうしていくのか話し合いを繰り返していった。「こんな時こそ今までどおり行うべき」という意見と「状況をみながら変化が必要、中断も視野に入れて」という意見で別れ、調査は足踏み状態だった。しかし、それから約1ヶ月、静まりかえった街中に灯が灯りはじめ、閉じていた商店や商業施設が営業再開され、私たちの調査もやっと動き出した。もう6月に入っていた。

どハマりしてる人に聞きたい

無人駅の芸術祭に作家として参加していた写真家のクログダさん。芸術祭後も、仏像補修のためにクラウドファンディングを行ったり、薬師さんの写真集を制作したり、すっかり薬師堂とこの地域に入ってしまった。アーティストと地域の人々、どちらもお互いを想いあって、よろこぶ顔が見たくてやっている。そこにはとっくにボランティアという言葉を超えてしまった関係性ができている。

返すことは難しいけど 返せない前提で楽しみます

クログダ ユキ氏

(UNMANNED 無人駅の芸術祭
/大井川・アーティスト・写真家)
坂本 政司氏
(佐澤薬師堂 奉賛会・さかもと
農園)



アンマンドの時に、びっくりしたことがあって、嵐の時にここにテントがあったらいいな思っていたら、次の日にびしょでテントができていたんですよ。笑。魔法かと思うくらい、当たり前がありました。それって人を喜ばせようと思って、**見返りとかなく、必要だからやってくれた**と思うんですけど。「あれやっといいで」ってニヤッと笑うんです。(クログダさん)
雨が降ったらここはいるところないじゃん。なのでかわいそうだなと。お客さんもずっと傘さしているのも大変だから屋根があればちょっといいかなあと。そしたら仮設のテントだよ。喜んでくれることは**出来る限りやってあげたい**と思って。(坂本さん)
すごくいっぱい喜ばせてくれて、返すことは難しいんですけど、一緒に楽しみたいなと。だからもう**返せない前提で楽しみます**。(クログダさん)

関わりしろがあるから 関わっている

後藤 司氏 藤井 絵氏
(富士の山ビエンナーレ・
サポーター)



Q: ボランティアという言葉はどう思いますか?

ボランティアといえばボランティアだけど、そういう気持ちでは参加してないですが、仕事じゃないし、完全に趣味の活動かといわれるとそこも違う。イベント開催のために、力を能力を割いているという部分を考えると、遊びに行っているのとも違うかなと。そうすると、ボランティアという枠組みの中には当てはめていくのかもしれない。(後藤さん)
私もボランティア参加ではなく、**何か関わりしろがあるから、関わっている**という感じです。生活があるし子供もいて自分ができる範囲も限られている。でも関われる、最大限のところに関わっているから、ボランティアをするという感じではないです。でも誰かに聞かれたときには、わかりやすくするためにサポーターもしくはボランティアと説明することはあります。(藤井さん)

Q: ボランティアで得られるものは?

また、喜びや何か役立つことはありますか?

やっぱり、人との関わりです。自分が何か考えた時に、話を聞ける**人脈が増えました**。普通に生きてたら会えない人たち、その人たちの考え方を**知ること**で**視野が広がった**。自分は建築の仕事をしているので、展示会場の使い方とか、ワークショップやレジデンス時の建物の使い方は大丈夫かと相談を受けたり、富士の山ビエンナーレでの**自分の居場所**がなんと**く見えてきた**ところですよ。(後藤さん)

関わる人全員対等な関係

羽鳥 祐子氏(原泉アートプロジェクト・代表・ディレクター)
近藤 和也氏(原泉アートプロジェクト・サポーター)

どれだけイベントのクオリティーが高いかということはもちろん大事ですが、日常のアーティスト・イン・レジデンスに力を入れていて、その結果、いい作品が仕上がって、より良いものができています。**関わる人全員がヒエラルキーなく、対等な関係**であることを大事にしています。(羽鳥さん)

1年目は楽しくてどんなに嫌なことがあっても楽しさが上回ったけど、2年目はイベントとしてレベルアップして、やりたい事のクオリティーが高くなって、1年目と同じ感じで関わっていたら自分が本当にボロボロになって、夜、LINEや電話がかかってくる「羽鳥さんかな…」ってギクッとしました。笑(近藤さん)
2年目は、いろいろなところから期待されることが増え、取り組みを言語化するようになりました。その中で**サポーターのあり方も**考えていましたが、**結局、やり遂げることに意識が向きすぎていた**ことに気づき、楽しい部分で関わってもらわなければならないと反省しました。その上で、これまでできて、一緒に楽しんでくれて感謝の気持ちでいっぱいです。(羽鳥さん)



楽しいと大変の感じが絶妙

普段の仕事で絶対に会えないような人と、**すごい近い距離で関われる**ことが純粋に嬉しいです。羽鳥さんがすごい魅力的で、**巻き込み力も抜群で、つい引きこまれてしまう**んです。(近藤さん)

※1 アーティスト・イン・レジデンス アーティストが、ある土地に滞在し、作品の制作やリサーチ活動を行なうこと、またそれらの活動を支援する制度。

静岡市のアートボランティアのルーツ、甲賀さんへインタビュー

大道芸がなぜ「ボランティアでやろう」となったのかは、まずボランティアよりも市民主導方の協働社会がくるなと思ったから。約30年前1992年。このまま行政に任せていたらだめだ、街のアイデンティティを持たなくてはならないなと。ヨーロッパに行くと、みんな個性を持っていてプライドを持っていた。文化芸術の視点で何かできないかなと思いはじめて、それが野外文化祭に昇華していくんだけど、その時に「街を劇場にしよう」と言ったんです。僕がなんでボランティアできていたかということ、まちづくりの活性化に関わる仕事ってその当時はそんなにないし、プロデューサーっていったって実績もないからプロデューサー料をもらってはおかしいよねと。ライフワークに近いかも。ライフワークだから、**自由度を持ってできたのかも**知れない。例えば、有償であつたら、成功させるところにこだわりを持つんだけど、**ライフワークだからそんなのいいんだよ楽しいフェスになれば**。そこに、やれ何十万人来ようが関係ない、数字にこだわりたくないわけ。活性化というのは、**市民の意識の活性化**が一番。市民が変わることが一番大きい。二番目が芸術。そのための戦略として、僕は、大道芸を選んだ。



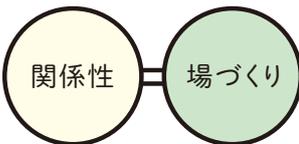
甲賀 雅章氏
(大道芸ワールドカップ
in 静岡元プロデューサー・
ストレンジシード静岡
コンセプター)

じんじんさん インタビュー

2019・2020年とめぐるリアート静岡にて野点をおこなった美術家のじんじんさん。参加した私たちは、説明会の内容や手がき資料、当日スタッフとの関わり方に驚愕した。そこではゆりとした関わり方とともに、優先順位や注意ポイントがはっきりと示されていた。この完成度に達するまでの道のり、考え方、聞きたいことが山盛りだった。



きむら としろう じんじん 氏
(めぐるリアート静岡 野点・陶芸家・美術家)



野点の場合は 風景を思いついた

野点の場合は茶道からはスタートしてないですね、**風景を思いついた**んです。**魅力が真ん中に置いてあれば、そこで発生する関係性は確かなものであるはずと信じて、あとは、その魅力的なものが、どれだけ開かれているかどうか**に全力を注ぐ。野点が、1回きりの現場で、次の現場のことを考えなくてよくて、翌日はもう知らんわってという現場だったら、どう片付けてもいいんだけど、あそこにある道具類は静岡の前の開催地の人が、ちゃんとケアして、片付けも一緒にしてくれたから静岡に届いて。で、静岡での片付けは、仙台のスタッフに手渡すと思うと、**連続で使っていく大切な道具で、**そうなる納め方っていうのは決まってくる。



機嫌の良い現場でいたい

Q: じんじんさんは、ボランティアって言う言葉を使わないんですか。

使わないですね。なぜ使わないんでしょうね。でもボランティアという言葉そのものを嫌悪しているわけではないと自覚はあるんです。その言葉自体を嫌っているのではなくて、**ボランティアって言った時に発生する相手との関係性。**ボランティアと言ったときにこうなっちゃう…という、いろんな事例とか、実体験をした結果、多分避けるようになってきたのかなあ。紛れもなく一緒に作っている現場でもあると思う。自分が計算して納められるパーツとして、ボランティアスタッフを捉えることはできないですね。**もっとはっきり現場に作用して、僕がコントロールできない作用を当然する人たち。**それをなんとか表そうと、世間では色んな言葉が作り出されているけど、どんな言葉でも、おそらく名付けられないだろうと思う。いや、名付けたくないんでしょうね、野点でのスタッフやお客さんとの関係を。**せつかく色んな関係が混在してる豊かな現場を一言でまとめたくない。**言葉にするとどうしても矮小化されちゃうって僕は思ってます。言葉をなめているのではなくて、必死で捉えようとしても、捉えられない部分。そうであって欲しいと思うんですね。それが名付けられた瞬間に、おそらく人間は、目的化しはじめるので。名付けられないままであれかしと願ってます。



自分自身も機嫌良う、**機嫌の良い現場**でいたいし、スタッフも、人にも、やっぱり機嫌良ういてほしい。スタッフが寒そうにして機嫌悪かったら、誰も寄ってきてくれないですね。あったかいカッコして機嫌よく。スタッフやお客さんが、機嫌良くしてくれているから揉め事にならないんですよ。そういう意味では、僕は、スタッフや、お客さんに守ってもらっているとも言えるんです。そういう関係でもあると思うんです。**やっぱりスタッフの気配によって守られている場**でもあるんですね、野点は。

3年目 (2021年度)

さらに聞いてみたい おかわりインタビュー

2年間にわたる調査の中で、モヤモヤが解消されつつあった。3年間のまとめに差し掛かり、もっと深掘りしたい人物やアートイベントにフォーカスを当てることにした。また、世界で最大級のボランティアを必要とするイベント、オリンピックパラリンピックが日本で開催され、静岡県内でも競技が行われた。今回の調査対象とは違うタイプではあるが、オリパラボランティアについても共通点があるのではないかと。アートボランティアが魅力ある活動としてあり続けるためには何が必要で、主催者、参加者、アーティストはどんなポイントを抑えたいのかを探していった。



違和感を無視しない

Q: 作家やボランティアとの関わり中で何かを変えるきっかけ、気づくためのポイントは?

違和感を無視しないことですね。ここで起こっていることは、全てがアートデイズを作るプロセスなので。例えば、作家が交流できたのか、サポーターが気持ちよく入り込めていないとか、いつもノリノリなのに、ちょっとコミットしていないとか、そういうサポーターがいたらすぐ課題を共有して整理をします。会話の中でこちらの思考も整理されていくんです。

ここには源泉にコミットしているという思いの人しかいないので、**半端な気持ちでコネクトしていれば気付き**ますよね。全員が気持ちいい状態のできるのが理想で。でも、ほころびはできるものなので、**コミュニケーションでなくす**ようにしています。すぐにできない時もあるけれど、絶対、後でできるので。 羽鳥 祐子 氏(原泉アートプロジェクト・代表)

オリパラや災害ボランティアもアートボランティアと共通するマインドがありそうだ

Q: こういう活動に積極的に参加をした動機は?

それは**楽しいから**です。スポーツの力ってすごいじゃないですか。とにかく、スポーツをやっている人を応援したい、ということと、同じ話題で職場で盛り上がることなど、楽しみであり、喜びであり、共有したいという。

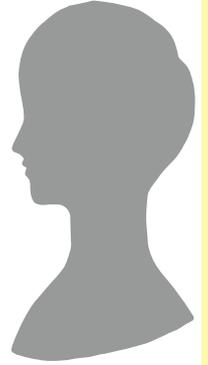
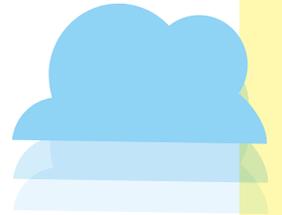
Q: 客として見に行くのと、ボランティアで参加するのは違いますか?

関わり方が違います。ちょっと内部に入ること、関係者の一部でもあるし、何かの手伝いをできるという喜びもあります。やはり日本や静岡を好きになって帰ってもらいたいですね。

Q: ボランティアを続けていくモチベーションは?

通うには実際お金がかかるんです。でもそれは自分が楽しいから行くわけで、私は犠牲になっているという思いは本当にはないです。震災時のボランティアも人のためにやるという気持ちだと、自分が潰れちゃうんで、**「自分のために行く」と**そう思うようにしています。 松浦 栄一氏(オリンピックパラリンピック ラグビーワールドカップ 東日本大震災ボランティア)

モヤモヤ解決



インタビューで出会った言葉がヒントになって 視野が広がってモヤモヤが晴れてきた

40人のインタビューをして、可能な限り視察をして、リサーチもして、ボランティアにも参加をして、改めてアートボランティアを考えてみると、それぞれの活動は良いところも、課題や問題点もありました。本来であれば『アートボランティア〇カ条』とまとめたいところですが、実は、本当にケースバイケース。現場によって、考え方や対応が逆だったりもします。しかし、今、アートボランティアにとって大事だと思うことをノートとして書き記します。

アートボランティアのノート

たまたま形がボランティアなだけであって、
自分としては「ファン」という感覚

アートボランティアのみならず、
本当に「ファン」なんだと、インタビューで感じた。
実はその活動を心から愛していて
大事な存在なのです。

アーティストも、地域の人も、サポーターも、主催者も、
関わる人全員がヒエラルキーなく 対等な関係

違和感を無視しない

これを大事にしてくれる
イベントで
ボランティアしたい!

じんじん師匠から学んだ
現場で大切だと思うこと4つ

◆ **安全第一**

現場によって違いはあるけれど
焦って事故になったり、せつかくの時間を
セカセカ、イライラ過ごすのはもったいない

◆ **すべてゆっくりしていねいに** 「せかさない」

◆ **余白と誘発** 余白がツネにあることが大切です

◆ **体調・服装** スタッフがしんどいとお客さんもしんどい

長くいていただいた方が「おもしろい」

丸一日、
日常の仕事も肩書きも忘れて
ただの人として参加してみる



気づきMEMO

調査をはじめる前の モヤモヤしていた私へ

「何か違う」と感じたら、一旦やめてみるのも手です。ボランティアなのですから。そして、またやってみようと思ったら違うコミュニティ、タイプや規模の違う活動に参加してみましょう。全く違いますよ。そもそも、大阪ボランティア協会の理事長、早瀬昇さんもおっしゃっていました。参加しやすいボランティア活動の一番のポイントは入りやすく出やすいこと、入りやすい入口の作り方だと。義務になって、やらされている感が出てきたらボランティアではないのです。昨今では半日、1日単位の活動も多いのでそこから始めるのがおすすめ。十分楽しめますよ。そして、単発ボランティアは、当日参加しても大丈夫のように案内されていることが多いです。また、今、お気に入りのイベントや活動で、ボランティアを募集しているか探してみましょう。その活動自体が好きであれば、よいアートボランティアとの出会いのチャンスです。私がアートボランティアで大切にしたいことは『アートボランティアノート』に書き記しました。一緒に考えて、話してみませんか。

3年間の活動

主催者 10名、アーティスト3名、ボランティア27名
インタビュー調査 26件、40名にインタビュー
アンケート調査 86名の回答

視察イベント10箇所以上／ボランティア参加 5回以上／調査報告会2回／登壇1回

2021年度

3年目

インタビュー調査
(3件 6名)
まとめ作業



調査についての登壇
2021.10.9

神戸市立灘区民ホール サポーター募集企画
特別講演会
「市民がアートイベントに参加すること」

2019年度

1年目

インタビュー調査
(13件 19名)



報告会
アートボランティア
ナウ2020

2020.2.29

静岡市地域福祉共生センター「みなくる」
参加者 20名

2020年度

2年目

インタビュー調査
(11件 15名)
アンケート調査
(86名)

オンラインにて2年目までの
報告及びゲストトークを開催

アートボランティア
ナウ2021

参加者 26名
Youtube視聴
148回



2021.2.27
ゲスト

井原 麗奈 氏
大石 歩真 氏
兒玉 絵美 氏
山本 由加 氏

thanks 調査に協力いただいた皆さま

UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川／遠州横須賀街道ちっちゃなちっちゃな文化展 遠州横須賀倶楽部
川根本町久野脇地区 佐澤薬師堂奉賛会／神戸市立灘区民ホール／七間町ハプニング／静岡県アートマネジメント研究会
公益財団法人静岡県文化財団／公益財団法人静岡市文化振興財団／静岡大学 地域創造学環
SPAC 静岡県舞台芸術センター／大道芸ワールドカップ実行委員会／ハママツ・ジャズ・ウィーク／原泉アートプロジェクト
富士の山ビエンナーレ実行委員会／めぐるリアート静岡／調査にご協力いただいたすべての皆さま

調査の終わりに

3年間にわたるアートボランティア調査の終了にあたり、調査にご協力をいただいた 100 人以上の皆さまと、どのような結果になるのかもわからない調査に対して、厳しく、また温かなアドバイスをいただいた静岡大学人文社会科学部 平野雅彦先生、現在アーツカウンシルしずおかプログラム・ディレクターを務める鈴木一郎太様、調査を支えていただいた静岡県文化財団の皆さまにお礼を申し上げます。静岡県には多くの宝物があります。街のなか、山中の地中、川のほとり、海に、宝物は静岡県のあちこちに存在をしています。宝物を大切に守っているボランティアと主催者の皆さまの話聞き、調査が進むにつれモヤモヤは徐々に消えていきました。

調査は一旦、これをもって完成の形となりますが、インタビューに答えていただいた皆さまのリアルな言葉ひとつひとつを大事にして、文化活動の貴重な記録として残していきたいと考えています。今回掲載できなかった多くの言葉は、別の形でもお伝えできるよう計画中です。再び、アートに関わる皆さまの素敵な笑顔に出会える希望をもって、調査報告の終わりとさせていただきます。 高橋 晃一朗

調査メンバー 繁田 和美 深野 裕士 高橋 晃一朗

サポートスタッフ 本間 美智子 小林 稔和 吉田 颯 吉村 友利

協力アドバイザー 芸術文化観光専門職大学 助教 井原 麗奈

認定 NPO 法人しずおか環境教育研究会 理事長 山本 由加

静岡県文化財団 ふじのくに文化プログラム推進事業助成

ふじのくに未来財団 団体指定助成事業

今後の展開・お問い合わせ

<https://www.3.hp-ez.com/hp/mesenashizuoka/>

特定非営利活動法人音楽の架け橋メセナ静岡 事業担当者 高橋晃一朗
〒420-0071 静岡市葵区一番町 50 番地 静岡市番町市民活動センター内
mesenat.shizuoka@gmail.com TEL/FAX 054-272-3600

